

学習指導案に、自校の研究の意図が表れているだろうか。研究の考え方が単元計画だけでなく、本時レベルまで反映されなければ研究実践の意味は薄くなる。本時案にある「学習活動・学習内容」や「指導・支援と評価」などの欄に記載してあることが、唯一、参観者にとって手がかりである。

小学校4年生の社会科「きょうどにつたわるねがい」の実践から考えてみたい。ここは、先人の工夫や努力によって、地域の生活向上に寄与したことを学ぶ、いわゆる「開発単元」と呼ばれている単元である。本時は「古地図や資料から、河川の地形的特徴と治水方法について考えることができるようにする。」ことを目標にしている。本時の第2活動は、次のようになっている。

学習活動・学習内容	活動への支援	資料・評価
2 江戸時代、川流域に住んでいる人々が困っていたことについて考え、発表する。 ・自然災害に苦しんでいた話（先人の願書） ・河川流域の特徴 ・河川の地形による弊害	・地図を見ながら、河川の地形的特徴を読み取り、地形による弊害について考えさせる。 ・河川の上・中・下流のどの場所でどのように困っていたのか理由とともに、自分の考えをまとめさせる。その後、下流にポイントを絞って考えさせる。	<資料> 先人の願書 【評価】 改修前の河川の特徴と弊害について考えることができたか。（活動）

そして、授業の実際は、授業者は当時の人々はどのようなことに苦しんだのか、どんなことに困っていたのか、堤防が壊れるならどこが壊れるかと発問を続けた。ここで、注意したい。活動への支援は「～考えさせる。」と「考えをまとめさせる。」とある。学習活動は「人々が困っていたことについて考え、発表する。」であるから、子どもたちが考え、発表できるように支援することが肝要である。にもかかわらず、その支援は、**河川の地形的特徴の読み取りと困っている理由とともに、自分の考えをまとめさせる。その後、下流にポイントを絞ること**とある。この支援で子ども自らが、人々が困っていたことについて考え、発表できるであろうか。にもかかわらず、評価は「改修前の河川の特徴と弊害について考えることができたか」である。

このように、「学習活動」「教師の指導と評価の行動」の関連が分かりにくいことが多い。あくまでも、主体的な学習活動を導くために具体的な支援が行われ、その具体的な支援の根拠を評価と考えたい。つまり、例えば「～のような姿があれば、～をさせる。」など、評価と支援を連動させることが重要と考える。ここの第2活動の評価で、考えることができなかったと授業者が評価したら、どのような支援行動をするのであろうか。もし、学習活動、評価と支援の関連が曖昧であれば、主体的な学びは保証するためにも、今すぐ整理してほしい。（芝）